止と観について

光地英学

一

止観の止は奢摩他 śamatha であり、観は毘婆舎那 vipaśanā（毘鉢舎那・毘撥舎那・毘般舎那・毘跋舎那）である。真諦訳「大乗起信論」下止観門に、「所レ言止者、謂レ止二一切境界相一、随二順奢摩他観一義故。所レ言観者、謂レ分二別因縁生滅相一、随二順毗鉢舎那観一義故。」（大正三十二、五八二a）と説いている。[1] 止観と奢摩他・毘婆舎那とはかく同一性のものであるが、先ず止観の原語の舎摩他・毘婆舎那の名を以て説述している経論について、その意義の攻究を試みる。

先ず直接的な意義として、奢摩他は寂静[2]・摂心[3]・心一境性[4]等であり、毘婆舎那は智慧[5]・如実観察[6]・正見[7]等である。次にその包容する内容上の意義として、奢摩他は自性清浄[8]であることを観想する、実[9]の如く法を見る、煩悩[10]を断ずる、身心軽安[11]を得る等である。毘婆舎那は智慧[12]を証得する、心念[13]つまり三昧に住する、智慧[14]にて法の相を見る等である。

これは奢摩他・毘婆舎那の各個別的考察であるが、両者を一俱にした直接的意義は、八正道[15]の法そのものであり、内面的意義としては、解脱[16]を得る、身心[17]を澄浄・軽安ならしめることであると解される。

要するに奢摩他は心を空ずることであり、毘婆舎那はその空じたところより自ら展開する心内または心外に関する正見である。前者は心の消極的作用であるのに対し、後者は積極的作用である。奢摩他と毘婆舎那の両者の関係については、奢摩他[18]に依つて自ら毘婆舎那が引発される。が両者は密接[19]不離であり、互[20]いに雙運さるべき関連性を帯びている。

1　なお摩訶止観巻三（大正四六・二二c）翻訳名義集巻四（大正五四・一一一八b）。

2　大乗宝雲経巻五（大正一六・二七〇a）大乗菩薩蔵正法経巻三十七（大正一一・八七八a）大宝積経巻五三（大正一一・三一二c）浄土論（大正二六・二三三a）など。

3　大乗荘厳経論巻十（大正三一・六四三b）。

4　宝雨経巻八（大正十六・三一九b）仏説除蓋障菩薩所問経巻

一五（大正一四・七四一b）大乗菩薩蔵正法経巻三七（大正一一・八七八a）阿毘達磨集異門足論巻三（大正二六・三七五b）。

5 大乗菩薩蔵正法経巻三七（大正一一・八七八a）浄土論（大正二六・二三一b）阿毘達磨集異門足論巻一八（大正二六・四四〇b）同巻三（同二六・三七五b）など。

6 宝雨経巻八（大正一六・三一九b）。

7 翻訳名義集巻四（大正五四・一一一八b）。

8 大乗随転宣説諸法経巻中（大正一五・七七七a）。

9 勝天王般若波羅蜜経巻二（大正八・六九九a）仏説除蓋障菩薩所問経巻一五（大正一四・七四一b～c）。

10 仏為娑伽羅竜王所説大乗経（大正一五・一六一c）。

11 解深密経巻三（大正一六・六九八a）大乗随転宣説諸法経巻中（大正一五・七七七a）瑜伽師地論巻七七（大正三〇・七二三c）。

12 仏為娑伽羅竜王所説大乗経（大正一五・一六一c）方広大荘厳経巻一（大正三・五四五a）。

13 阿毘達磨法蘊足論巻五（大正二六・四七八a）同巻六（同二六・四七九a）。

14 深密解脱経巻三（大正一六・六七五a）大乗宝雲経巻五（大正一六・二七〇a）菩薩善戒経巻三（大正三〇・九七九a）勝天王般若波羅蜜経巻二（大正八・六九九a）大宝積経巻五三（大正一一・三一二c）など。

15 決定義経（大正一七・六五三c）瑜伽師地論巻二九（大正三〇・四四五b）。

16 瑜伽師地論巻一三（大正三〇・三四四b）。

17 同三二（同三〇・四六四c）。

18 同巻一二（同三〇・三四一b）。

19 同巻三一（同三〇・四五八b）深密解脱経巻三（大正一六・六七四c）十地経論巻九（大正二六・一七五b）。

20 金光明最勝王経巻四（大正一六・四一九a）解深密経巻三（大正一六・六九八a）。

二

奢摩他・毘婆舎那の訳名である止観の表現を以てした場合の意義も、概ね同似である。強いて云うならば、ただ僅かばかりの説述の相違を示しているのみである。[1] 止観の関係も、奢摩他・毘婆舎那のそれと同様に云いうるのであり、[2] 止と観とは車の両輪の如くでなければならない、[3] その点も奢摩他・毘婆舎那の場合と軌を一にしている。若し止と観との両者が均等を得ないで、何れか一方に偏すれば、真の悟境とはなり得ない。つまり止に偏すれば昏沈・懈怠となり、心的活動を失う。従つて衆善・利他の悲心から遠離するようになる。[4] 止を俱わない観は、心の散乱を将来して正見を失う。故に止[5]観均等双修して、はじめてよく仏道を成ずるに至るのであるが、そのことを若干の経論についてみるに次の如くである。[6]

如来大智微妙独尊、止観具足成二最正覚一。（「長阿含経」巻一

——大正一・十a～b）

若止観不レ具、則無三能入二菩提之道一。（真諦訳「大乗起信論」——大正三二・五八三a）

1　例えば「摩訶止観」巻一に、止が邪僻の心を息め、観が菩提心を発する。（大正四六・五b）同巻三に、止は王三昧である。（大正四六・二九c）とある如く。

2　例えば止が寂静、観が智慧・正見・照の意味であることを、「摩訶止観」巻一（大正四六・一c～二a・十b）同巻二（同四六・一八c）同巻三（同四六・二一b～c）。観が法相を分別することを「釈摩訶衍論」巻八（大正三二・六五五b）。止観の関係について、止から観が生ずることを、「維摩詰経」巻上（大正一四・五二一b）等説示の如く。

3　陰持入経巻下（大正一五・一七九b）大乗理趣六波羅蜜多経巻八（大正八・九〇二c）守護国界主陀羅尼経巻五（大正一九・五四七c）大乗起信論（大正三二・五八二a）大乗荘厳経論巻五（大正三一・六一七a）瑜伽師地論巻五八（大正三〇・六二五a）同巻九〇（同三〇・八一〇b）同九一（同三〇・八一九b）同九二（同三〇・八二四b）。

4　真諦訳「大乗起信論」修行信心分（大正三二・五八二c）。

5　中阿含一五（大正一・五一九c）長阿含九（大正一・五三a）など。

6　なお奢摩他・毘婆舎那の場合は、「仏正法中二法雙行。彼奢摩他父、毘婆舎那母。彼二法種姓。偈言、毘婆舎那母、奢摩他為レ父、生三一切菩薩一、因二毘婆舎那、奢摩他等一故、有三一切正覚。」（三具足経憂波提舎——大正二六・三六一c～三六二a）。

三

止観にはそれぞれ類型がある。止つまり奢摩他には概ね、近分定所摂世間・根本色定所摂世間・根本無色定所摂世間・声聞独覚作意所摂出世・菩薩作意所摂出世の各奢摩他があるとして、都合五種の止が示されている。[1] つまり世間定の三種出世間定の三種の止のことであると思われる。観つまり毘鉢舎那については次の三種があるとされる。ここに特に注目したいのはこの三種の観についてである。「解深密経」巻三（大正一六・六九八b～C）に、この三種の観を挙げ、有相・尋求・伺察の各毘鉢舎那となしている。有相毘鉢舎那は三摩地所行の有分別影像を思惟するのをいい、尋求毘鉢舎那は善く理解していない一切法を理解するために思惟するのをいう。また伺察毘鉢舎那は善く理解している一切法について更に解脱せんがために思惟するのをいう。[2] このうち有相が定中の観であり、尋求伺察が定中と定外二面の観であると考えられる。

定の中と外の両面に関した観の内容は、四諦の苦諦、有為法の無常、不浄観、慈悲利他観等である。[3] これは既述の毘婆舎那が智慧にて法相を見ることの意に他ならない。これに対し禅定中のみの観は、止を基盤とし、止の展開としての観である。それは有分別の影像ではなくして、三昧中に映現する

もので、それがいうところの観に他ならない。尤も奢摩他についても、かかる意味内容を以て説示している向きもなくはない。[4] がしかし専ら三昧中の映像については観の上の事柄が主であるとなしうる。このことを「解深密経」巻三は次の如く示している。

（前略）於二如レ是三摩地影像所知義中一、能正思択最極思択[5]（大正一六・六九八a）。

三摩地所行有分別影像、毘鉢舎那所縁[6]。（大正一六・六九八b）。

「解深密経」以外としては

此是心寂処、説名二奢摩他一、観二彼種種境一、名二毘鉢舎那一。（六門教授習定論―大正三一・七七六b）

若修二毘鉢舎那一即得二無所観心一。（如来不思議秘密大乗経巻四―大正一一・七一二a）

殊に「浄土論」には

云何観察、智慧観察、正念観レ彼、欲二如実修一行毘婆舎那一故。（大正二六・二三一b）

とし、次いで観察を三種に説いて

一者観二察彼国土功徳荘厳一、二者観二察阿弥陀仏功徳荘厳一、三者観二察彼諸菩薩功徳荘厳一。（大正二六・二三一b）

また「観無量寿経」所説の観法、そしてたとえば弥陀観について「但当三憶想令二心眼見一」とあるなども、同轍にしていうることである。

いうまでもなく、かかる三昧裡の影像は客観界から映現するものでなく、識所現のものである。そのことを

由二彼影像唯是識一故。（解深密経巻三―大正一六・六九八b）此心如レ是生時、即有二如レ是影像顕現一。（中略）如レ是此心生時、相二似有一異、三摩地所行影像顕現。（大正一六・六九八b）

若行者見二仏而現一、将為二真仏一応レ作二是念一。此見仏従二何方一来、東西南北四維上下方所レ来耶。若将二此仏一是人所レ造応レ作二是念一。…如レ是観已、知二所レ見仏一。但由レ我於二精舎之中一、観二仏形像一、昼夜憶念。是故仏形常現二目前一。由レ是当レ知、我常見二聞一切諸法一、将為レ実者、皆従二自心一憶而起。（大乗修行菩薩行門諸経要集巻下―大正一七・九六二c～九六三a）

定外の観は八正道の正見・正思惟に連なるものであると思考せられるから、敢えて特異なものではないであろう。それに対し定中の観は、三昧より発する識所現のものとして大いに注目せらるべきものであると思われる。上掲の「解深密経」や、それによつている弥勒「瑜伽師地論」の如く、印度成立の経論にては定中の観の明示がある。このことからしても、印度の論師にては定中の観法が行われていたことが充分推測される。

これに対し、支那・日本にては比較的微弱であるように思われる。僅少であるこの方面の志考を試みる。かの天台智顗（五三八―五九七）は「釈摩訶般若波羅密経覚意三昧」（大正四

六・六二四c）にて、三昧に入らんとするならばまず坐中に心意を観ずる必要があるといつている。止は三昧の体であるのに対し、観はその相であり用であることからすれば、止と観の両者をいつている、更には観に重点をおいての説示であるものともみられる。

次に禅の方面に視点を移してみる。まず大医道信（五八〇―六五一）は、一を守つて移らず意を一物に注ぎ終日看て己まないことを主張している。[7] これは止観への方途でもあり、また観について述べたものでもあるように思われる。道信の資、大満弘忍（六〇二―六七五）については、打坐中世界に遍満すること、それが仏境界であり、清浄法身を証得している意味のことを表明している。[8] これは止に相当する。また観照を明かにしたこと、[9] 坐禅中、心中に空際を尽くして遠く一字を看ることを勧説していることなどは、観への方途を云つているものと考えられる。次に宏智正覚（一〇九一―一一五七）に注目したい。宏智についてはその「坐禅箴」がややその閃きを感じさせる。「坐禅箴」は「不レ触レ事而知、不レ対レ縁而照。不レ触レ事而知、其知自微。不レ対レ縁而照、其照自妙」という。客観的事象による知ではなく、心それ自らの映現であるから照であるといつているものと考えられる。このようにみてくるならば、この「坐禅箴」の語は定中の観であるともみられうる。しかし支那さらに日本の禅にては、かかる観としての意義に立つた止観、つまり禅は、尠くとも文献上からいつても極めて乏しいように思われる。なおこの点大方のご指示を得ば幸甚である。

1　瑜伽師地論巻六四（大正三〇・六五七c）。
2　瑜伽師地論巻六四（大正三〇・六五七c）には、五種の毘鉢舎那が示されている。一が尽所有性、二が如所有性、三が有相、四が思求、五が観察の各毘鉢舎那である。三から五までは、「解深密経」巻三の三種に相当し、一の尽所有性毘鉢舎那は、一切法の自性を知る観法であり、二の如所有性毘鉢舎那は、一切法の差別を知る観法であると解される。従つて四の思求、五の観察、或いは三種の二の尋求、三の伺察に含まれるものと思われる。かかる視点からして内容上、五種の毘鉢舎那も、要するに三種のそれを出ないこととなる。
3　増一阿含一一（大正二・六〇〇b）真諦訳「大乗起信論」修行信心分（大正三二・三四一b）。
4　例えば「於二心中一想二円満月輪量周二法界一、於二中観地字門一、了了分明如二珂雪一専注而住、即為二奢摩他一」（修習般若波蜜菩薩観行念儀軌――大正二〇・六一三c）その他は省略。
5　瑜伽師地論にては同巻七七（大正三〇・七二三c）。
6　前同　巻七七（大正三〇・七二四a）。
7　楞伽師資記道信の項（大正八五・一二八八b）。
8・9・10　前同、弘忍の項。